

## 【優秀賞】

# 黒

北川 輝

岐阜大学応用生物科学部 2年

### 要旨

現代社会の特徴は絢爛な色彩が街、メディアを覆っていることである。完全な闇に堕ちた夜はもはやサウダージである。なぜなら完全な暗闇を知ることができるのは生の直前と死の直後だけだからだ。そのためか黒色は忌まわしい色として迫害されてきた。しかし昨今の社会現象は、色鮮やかで幸福であるはずの生活が平和な精神を作るどころか、暗澹とした世界に生きていると感じることが多い。黒い感情とは複雑な感情の複合体であるが、黒色と人々の歴史と現在を生きる人々の黒に対する見方の傾向を証拠として、黒色の汚名を返上し、そしてその他の色こそ二枚舌であり、その裏面が人々を攻撃するという事実を暴露することを目的として報告する。

キーワード：カラス族、「女性らしさ」、色覚特性、自己防衛、発達障害

## 1. 序論

人は誰しも心に密室を持っている。そして子宮という暗闇から生まれ、最後には死んで「闇に」包まれる。黒は蠱惑の色である。

本報告は、黒色が人々と社会に与える影響について考察する。私が黒について論じようと思ったのは、黒い服を着た女性看護師に会ったときである。医療界では黒は不穏な色だとされるものだと思っていたので、もしかしたら日本で黒に対する感覚に激震が走ったのではと感じたからだ。そこから現代社会の姿を垣間見られると考えた。以下、黒に関する文献を読み込んだうえで論じた。

## 2. 黒と外面

1980年代まで、黒が衣服の色に使われることは珍しかった<sup>1</sup>。ところが、1981年に山本耀司、川久保玲がパリ・コレクションで「オリエンタルブラック」「ミステリアスブラック」という名の全身黒づくめショーを行った。これは世界の黒の常識を覆した。以降、日本では

「黒服は恰好いい」という風潮が広まった。たちまち学生や社会人の間で、黒をベースとした DC ブランドブームが流行し、「カラス族」と呼ばれる全身黒ずくめの女性が 15 年にわたり街を闊歩した。

その後も黒の威厳は衰えることなく、1990 年代には渋谷カジュアルが 10 代の間に流行り、黒は様々な色と相性が良いという理由で頻繁に出現した。1990 年から 2001 年には有彩色で身を飾ったギャルがファッション界を風靡し、黒は鳴りを潜めたが、2002 年に 1980 年代リバイバルが起きて、コンサバスタイル（お姉様系）の中に知的な雰囲気をもつものとして黒が使用された。

ここでは、カラス族に焦点をあわせ、なぜ黒が長きにわたり支持されたのかを考察した。まず、黒色に込められた意味についてだが、ここでは黒にこだわった芸術家に根拠を得た。谷崎潤一郎<sup>2</sup>の書籍「陰翳礼賛」では、女役の男性歌舞伎役者を例に挙げて、白い手の美は物質そのものにあるのではなく、その手を取り囲んでいる陰影に在ることを主張した。彫刻家 Kapoor<sup>3</sup> は暗闇を物理的かつ心理的な体験でもあると言い、光のほぼすべてを吸収する黒い塗料で楕円を描いて「驚くべき物質の物語」とも称している。画家マレーヴィチ<sup>4</sup> は 1915 年、白地のキャンパスに黒色に塗られた正方形のみの作品を発表し、正方形は「感覚」を、白地は感覚の外にある「無」を意味していると述べている。そして自身の芸術手法は、死んだ芸術が蘇るための原点回帰的なものだと言っている。

この 3 人からわかるように、黒は死や無といったものを表してはいない。むしろ、お洒落で意味ありげな色と解釈できる。このことと、「カラス族」の担い手である女性が結び付けられるかもしれない。というのは、現代日本の黒服のイメージとして「フォーマル、知的、礼節、大人びている、高ステータス、妖艶」とある<sup>5</sup>ことから、1980 年代の女性社会進出と無関係ではないと思えるからだ。

まず、黒服を着ればメイクの強さを女性自身が好みに調節でき、いずれも似合う。メイクがもたらす心理的効果は年齢群によって大きく異なるが、カラス族の主な担い手が 20~30 代だったということから、メイクは主に彼女たちの積極性の上昇に貢献したであろう<sup>5</sup>。その結果、社会では特権だとみなされる、「女性らしさ」の 1 つ「自分が自分自身に優しくして、自分の喜ぶことをする」ことの自由度が増したのである。黒服は、外見の装飾による魅力よりも、社会での仕事の成果で評価される男性におあつらえ向きの色だと思われるが、これを女性が着こなすことは、従来の女性らしさの 1 つ「男性に気に入られるために他者が望む自己像に近づこうとする」ことを放棄し、「他者との比較をするために自分と他者の服装を比較する」こともできなくすることだ。それに加えて、第二次性徴以降、女性は身体的にも心理的にも気だるさ、重量感が襲い、心に「秘密」を抱える。性は「鈍く、痛く、怖い」ものとなり、他者からの視線が原因で、自意識（身体への意識）は強まるばかりだ<sup>6</sup>が、ルーズな黒服を纏った「カラス族」は、「若さと魅力」が最盛期である 25~34 歳の女性らしいボディラインを捨象した<sup>5</sup>。

そのことが、性的葛藤が意識に上ることを阻止し女性自身を防御したのだ。つまり、黒服

は女性を女性らしさから分離したのだ。それにたとえ、男性からの視線をひきつけても、それに気づかないふりをすることができる。なぜなら、黒服の集団の中では、服装は均一化され、同調圧力や「周りからうく（優越）」といったこともないので安心できる。

1980年代は、男性の中性化、女性の男性化が著しく進んでいた。後者は、就職面接の時に女性らしさ（ホスピタリティマインド）が強いと、事務職としては良い評価を受けても、管理職の場合は不利になる傾向があったことが挙げられる<sup>5</sup>。

ちなみに、かつては黒を用いて女性らしさへの恭順が強制されていた。既婚者に施されたお歯黒である。白い歯は「面白いバカなことをいう」、「ストレートに感情を伝える」鏡となる。これらを黒く塗れば、「面白いことをいってはならない」「人を刺激しない会話をする」という従来の女性らしさを守らせるうえ、既婚者として「自分の感情を抑制する」こともできる。照明が暗い時代ならなおさらだっただろう。当時の女性は表現の完全な裁量が身内だけに制限されていたのだ<sup>6</sup>。

また、黒服の流行には、もちろん、カラス族を担ったバブル世代こと「新人類」の性格にも関係していたに違いない。彼らは楽しいことを人生の目標としていたので、自分らしさを発揮するためにブランドに傾倒したであろうし、アニメ・オタク文化や我が道を行く主義が発展したのも理解できる。その中で、「面白いことを言うことを禁忌とする」女性らしさは障壁だったのである。実際、70年代の女性運動家たちは、着飾ることを男性へ媚を売ることだとみなし、男性優位社会への服従として、化粧や服飾を目の敵にしていたのだ（化粧を自分の楽しみとしている女性もいるのだが）。

まとめると、黒服は女性らしさを隠匿して、その男性的象徴を借りて男性的に見せたのだ。そして、化粧もかつては義務のようなものだったが、個人の自由に任されるようになった。すなわち、1980年代には、女性は自分の社会的属性を一時的に変化させ、実力を発揮できるようになったのである。ある人は黒服の代償による化粧の映えで妖艶な女性を演じ、ある人は黒によって女性らしさを韜晦したのである。

ところで、序論でとりあげた黒い看護師についての考察だが、3本の論文からヒントを得た。近年、白衣は医療現場で忌避されている。それは、白衣を見た患者に高血圧の症状が出るがあると報告されたからだ<sup>7</sup>。その代替服の暗めの看護服は医療スタッフや患者からも不人気だった。そのうえ、黒服を着た人は白服を着た人よりも、自分のことを反道徳的だとみなす傾向があり、ズルをしやすい<sup>8</sup>。しかし、看護師と医師がチームになっている場合、つまり黒服を着て集団で患者を取り囲めば、患者の彼らへの好感度が上昇することが推測される論文がある<sup>9</sup>。これから考えると、黒服を着ていることが必ずしも、見る人に悪い印象を与えないことが示唆される。一見不穏そうに見えるカラス族の黒服でも、集団になれば絶対評価としての好感度は上昇するということがいえるだろう。

カラス族は1970年代の多彩で装飾的なフォークロアの反動とともにファッションの個性化の先駆けだったが、名称に「族」とあるように一般の若者ファッションからは逸脱していることを示している。それにもかかわらず、1人の逸脱した個性が自然に同調性と凝集性

を増して 15 年以上持ちこたえた「カラス族」は日本ファッション史では異色であり、ここにほかの色にはない黒の特性があると考えられる。

### 3. 黒と内面

黒は万人に知覚されうる。色覚特性という診断が下された人々でさえ、明暗を認識する桿体細胞は皆、正常だからである。錐体細胞 L 型（赤色を認識）を欠損している 1 型 2 色覚の患者の見える世界は深緑・赤・黒がすべて同じ黒色に見えてしまう。2019 年には地震地図における使用色から黒と緑が除外された。色覚特性をもつ人は日本全土で 300 万人いる。極端な例として視力・聴力・発話能力でハンディを負ったヘレン・ケラーが挙げられるが、彼女の見ていた世界は完全な黒だったのだろうか。

生まれたときから全盲だという A 氏は、赤青緑黒白といった原色は「見える」（花火も楽しめる）が、茶紫といった混色は見えづらいという。人の顔やシルエットもなぜかわかるという。その理由は A 氏も答えられず、自身の見ている世界を表現することはできないようだった。しかし、完全な暗闇ではないことは確かだった。このことから考えるとヘレンも色を少しは見ていたのかもしれない（ヘレンの世話役であったアン・サリバンの手紙には「完全に視力を失った」とあるが<sup>10</sup>）。

サリバン女史は、ヘレンの最も落ち着く質問が「考えることってどんな色なの？」であり、物事の色について興味津々だったことを自身の手紙の中で明らかにしている<sup>10</sup>。サリバンは「ヘレンが失明するまでの期間に見た色の記憶は、深まりゆく黄昏の中に見失われた風景」と述べた後、ある日には「子どもは生まれたときにすでに人類の全ての経験を内部に潜在的に引き継いでいる...これらの経験は写真のネガのようなもので、言葉の習得が、その記憶された像を現像し、あらわにするのだ」としている<sup>10</sup>。ヘレンは視覚としての色は見えなかったかもしれないが、言葉の力によって「色を見た」のである。ここで写真のネガという部分から、逆に言えば「言葉に言い表せないものは黒（ネガ）で表現される」ことを意味しないだろうか。

これが顕著なのは子どもの絵である。ルドルフ・アルンハイムが 1922 年に述べた芸術の効用の 1 つ、子どもが自分自身や環境をどう捉えているかの手がかりとなることを踏まえれば、絵画の黒も重要な証拠となるだろう<sup>11</sup>。例えば、大地震を経験した子どもたちは絵画の中で主に黒と赤しか用いないことが多い<sup>11</sup>。「黒い太陽」が描いてあれば、子どもたちの深い絶望を意味する<sup>11</sup>。他に、黒煙を描く子もいる。実際、この子は家庭内で欲求不満をこじらせており、その鬱憤晴らしに自身の排泄物をトイレの壁に塗りたくっていた<sup>11</sup>。黒煙は複雑な思いの混合物の噴出だったのだ<sup>11</sup>。

まとめると、黒が使われるのは「闇に紛れることでリスクを避けようとする無意識の自己防衛」「未知なことを示し象徴する色」「その絵を描いた子どもたちの否定的な情動と一致」というのが有力である（ここで留意すべきことは 7 歳未満の子に絵画の解釈は不可能であ

る。彼らは「前凶式期」で、色使いは極めて主観的であるからだ。もし、太陽を黒や紫で描いても異常だとは決して言えない<sup>11</sup>。

これからは「闇に紛れる」ことと、「自己防衛」に関して論議を進める。

なぜ人は闇に紛れることで安心を得るのだろうか。理由として我々の目の構造がある。

光が網膜に差し掛かると、S（青）・M（緑）・L（赤）型錐体細胞と桿体細胞（明暗）が守備範囲の光を捕捉する。これらの情報は水平細胞に伝えられ、明度の差が強調される（側抑制という）。その後、双極細胞・アマクリン細胞を経て、神経節細胞を通り、脳の外側膝状体に情報が運ばれる。この神経節細胞には3種類の細胞がある。ミジェット細胞は対象の色による形態と赤緑の色情報、色相・彩度の情報をゆっくり伝達する。パラソル細胞は対象の輝度による奥行きと動きの情報、明度の情報を迅速に伝達する。バイストレティファイド細胞は、黄青の色情報、色相・彩度の情報を中程度の速さで伝達する<sup>12</sup>。ここで黒をはじめとする無彩色には色相・彩度といった概念は存在せず、明度のみで規定されることに注意したい。

黒色に近い色は、パラソル細胞の敏捷さですぐさま認知されやすいのである。外側膝状体を過ぎた後は、第一次視覚野で、背側経路（空間・奥行き・動きの情報群）と腹側経路（色・形の情報群）に分解されてはじめて「物を捉えた」となるのだ。正真正銘の真っ黒は奥行きも動きも感じさせないはずだ。それならば、黒は一目見ただけではその内部の深淵さ（品性）は理解できない色、つまり、外見だけで一定の評価を得られる無難な色だという仮説が成り立つ。そこで以下のようなアンケートを2018年度入学の岐阜大学応用生物科学部生産環境科学課程の学生に自発的な参加を募り、北川を含めN氏（男性）とS氏（女性）の回答を頂いた。

### 【検証】17色のイメージ調査の概要

これは心理学的尺度構成法の1種であるセマンティックディファレンシャル法に基づいている。アメリカの心理学者Osgoodが開発した手法で、デザインや配色など、問題となっているイメージや印象を多角的・総合的に把握するのに秀でている。17色の色紙それぞれについて、14の形容詞対ひとつひとつに、5段階評価して頂いた（図1）。問題は2つあり、「17色それぞれを14の尺度で評価せよ」と、「14の尺度のうち、それぞれの色に特徴的な尺度を4つ選べ」であった。

第1問の3人の回答を17行14列の表（相関行列）に変換した。合計238個のセルにはそれぞれ、3人の数値の相乗平均を挿入した。統計ソフトRStudioに通し、縦軸に因子数を縦軸に固有値をプロットしたScree Plotを得た。その結果、14の尺度は4グループに分けられることが最も妥当と考えた。それは、甲）素材感<ACM>、乙）鮮明感<BDHIN>、丙）品性<FGL>、丁）爽快感<EJK>であった。それぞれの名称は北川が名づけた。この4因子で全体の83.7%を説明でき、甲は29.2%、乙は21.4%、丙は18.3%を、丁は14.8%を占めていた。

ちなみに、1人1人の回答それぞれを解析すると、各5因子でまとめられた。北川は「向こう見ず、**柔和**、**洗練**、**弱さ**、**不透明さ**」で71%、N氏は「**子供らしさ**、**粘着性**、**新しさ**、**柔らかさ**、**幻想的**」で83%、S氏は「うつろい、**ロマン**、**ピュア**、**洗練**、**貞淑さ**」で78%を説明していた（並び順は、説明度が高い順に並んでいる。以下字体がそれぞれに対応）。北川はこれらの因子を「**素材純度**、**弾力性**、**洗練具合**、**運動性**、**透明度**」と命名した。以上の結果より、因子数は違うが、Osgoodの提唱した3因子説「**評価性**（快・不快・受容・拒否）」「**活動性**（動静、速度）」、「**力量性**（強弱、軽重）」は網羅している<sup>13</sup>。ここで注目すべきは3人とも明度の奥行きから感じる色の運動性が上位に来ていることだ。

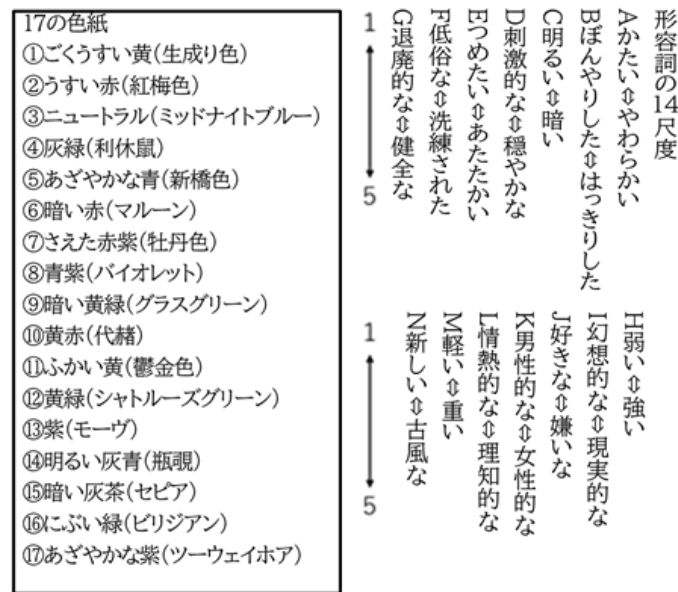


図1 色紙（左）、形容詞群と回答の仕方（右）

これは素早くアンケートに答えるよう指示したからで、回答中はパラソル細胞の独壇場であっただろう。次に第2問の解析だが、3人の回答からは確率論からは考えられないほど似通っていた部分が多かった。これは文化の共有のなせる業と言うべきか。

3人の回答から、17色において4因子の力量関係を調べた。たとえば、③（本報告では黒とみなす）、甲は0.36、乙は0.45、丙は0.18、丁は0.00と総和が1になるように得点をつけた（図2）。16色も同様である。

図2（Ⅱ）の得点の大小より、③は甲乙が優勢である。他の色についても次のことが分かった。1つは、全体として4因子がバランスよく得点した色は存在せず、個人として4因子が全て出現した（すべて+）色も存在しなかった。

2つは、甲かつ乙優勢型の色は①③⑨⑪⑫であり、黄・黒・黄緑系統であり外見からすぐさま判断されやすい色である。それに対し、丙または丁優勢型の色は②⑥⑦⑧⑩⑭⑯と赤・紫・深緑・灰青系統であり外見からはその趣が捉えにくい色である。全体としては、丙丁の出現頻度は甲乙よりもずっと低く、これは素早く答えるというルールを守っている。個

人間で見ると、さらに多様性が生まれている（図3）ことから、黒に限らず色に対する感じ方は人それぞれである。この状態のことを、以降「こだわりに差がある」と表す。



図2 第2問で③ミッドナイトブルー（黒に近似）の回答の処理法（I）（注1）

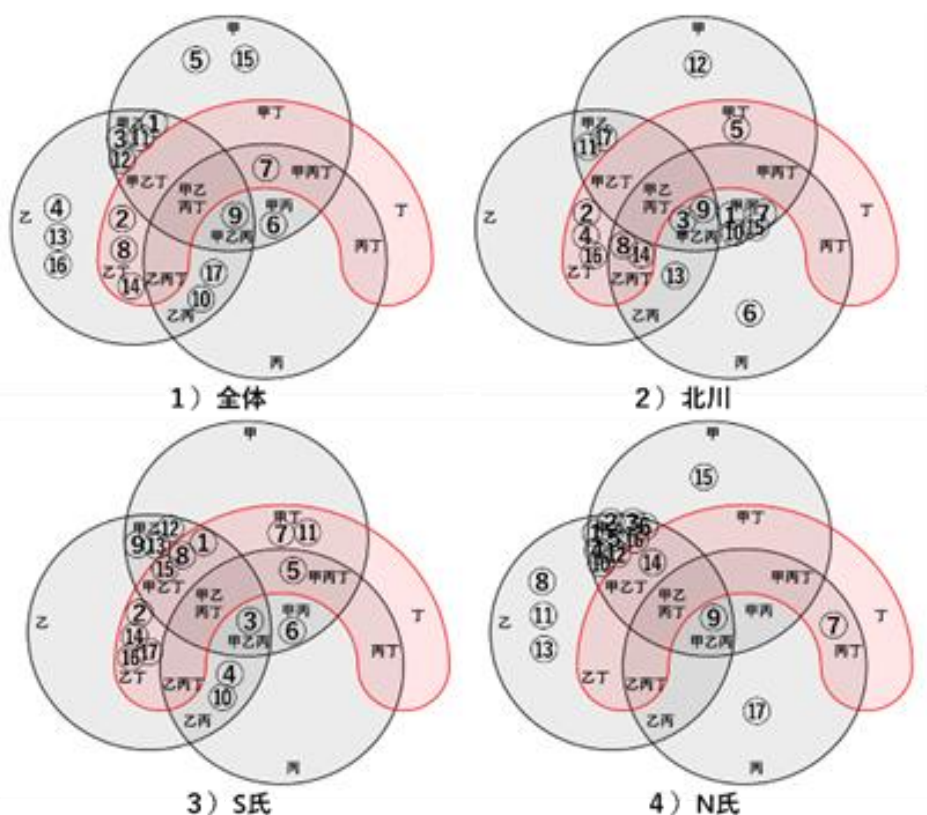


図3 算定ルールに従って作成した Venn 図

## 4. 黒と社会

こだわりといえば発達障害（ADHD, LD, ASD の少なくとも 1 つで構成）の ASD（自閉症スペクトラム障害のこと。そのうち IQ と言語の発達が優れているものをアスペルガー症候群という）を想起する。自閉症の人は、自身の五感の一部が傑出して高感度である（感覚過敏）ために様々なトラブルに悩まされている。そしてそれぞれの感覚が相互につながりにくいというのに、感覚と肉体の運動の連係もままならないことがある<sup>14</sup>。

もちろん「視覚過敏」というのも考えられ、強い輝度をもつ色や光を始めとして、色の急激な変化をも恐れるという。一般的に自閉症の人は身の回りの環境の変化を恐れている。なぜなら、自身の感じていることさえもわからない状態だからだ。自分自身ではなく、周辺のモノを中心にして自分が置かれている状況を認知する<sup>14</sup>。

すなわち、何らかの生物学的原因が感覚過敏を惹起し、本人は「こだわり」（環境認知の重要な手がかり）を希求する。このこだわりが幼少期独歩前の三項関係の共同注意（親がモノを指さして子どもも同じく見ること）を妨げ、今後の意思疎通に難を成す<sup>14</sup>。

なお、この「こだわり」の形成には男性型の脳と環境要因が正の効果をもたらす。つまり、男性は何かを思いゆくまで突き詰めるきらいがあり、昨今の色覚情報の荒波が自分の世界に没入する機会を増やしている。逆に、女性型の脳は「出る杭は打たれる」で、仲間同士で一致した共感を求めがちで、特異な「こだわり」の出現を糾弾し、陰湿ないじめの原因にもなりうる<sup>14</sup>。その「こだわり」を形成する最大の勢力は「アニメ」といえそうだ。

なぜなら、精緻なプロットに従ったアニメのキャラクターの群像は一度描かれると改変不能であり、現在の自分を忘れて憧れのキャラに「なりきる」ことができる。

現実に「オタク」と自称する人々は、「狭く、特殊な事柄に包括的な（全世界の）普遍性を詰め込んで投影した」と言われるように、窓も開けず、薄暗い閉鎖空間に閉じこもり、夥しい対象物に囲まれて自身の感覚全てを何かに投入するのである<sup>15</sup>。外界との連絡を絶った自身の世界は無限大の欲望で深化するブラックホールだ（Kapoor の楢円と類似）。

議論の余地があるが、幼女を 4 人殺害した M 元死刑囚は自分の身体的障害に劣等感を抱いており、人間の肉体、性行為そのものに嫌悪感を抱いていたようだ<sup>15</sup>。しかし他者とも会話したくて、暗闇の中で鑑賞したデジタル化された女体を神格化し、自身の置かれている境遇を投影することで慰めを得、安全地帯にしたものと考えた。しかし幼女に自身の障害を指摘されて、彼女を殺し自身の牙城を自ら破壊した。ちなみにこの頃に初めて漫画において女体が性的対象として描かれ、「出産シーン」に神秘的な意味が女流作家の手によって付加されたといわれている<sup>15</sup>ことから、黒の社会的なイメージに「孤独の闇」「神秘的な生命の起源」が力を増したに違いない。

他にも某教団の修行施設は人里離れた場所で外部との連絡を絶った薄暗い部屋であり、狂気が暴れたのである<sup>15</sup>。黒を自己防衛の鎧としたのだ。



私は、色が人の行動を決定づける強力な要因であることを示すために、LD との診断を受けた当時 19 歳女性の O 氏本人と癲癇の 1 種 Lennox-Gastaut 症候群（しばしば知的障害を誘発し、ASD、ADHD に酷似した症状も現れることがある）に罹患している 32 歳男性 K 氏のお母様にお話を伺った。

まず O 氏の好きな色は黒青赤紫であり、当日も黒服に身を纏う「カラス族」だった。血やモンスター、悪魔が登場するアニメを好み、自身の興味の対象に関して正確に暗唱する。しかし数字が絡むことに対しては大変苦手である（例えば「22 時は何時？」という質問）。黒服は落ち着くという理由で着こなしているようで、暖色系で女性的な服は好まないようだった。

次に K 氏の好きな色は青、赤、橙でありその理由はルパン 3 世が着ている服の組み合わせにより、食事の時はルパン 3 世がプリントされたマグカップでないと落ち着かないという。またあるお笑い芸人の影響で赤・黄のストライプが入った靴下も日々着用している。そして好きなビデオの話はすべて記憶しており、膨大なビデオ書庫から特定の台詞が出てくるものを正確に選び取れるという。

これらのことから、アニメが万人の色選好における「こだわり」やジェンダーを決定付ける可能性が示唆された。黒服が女性らしさを隠匿する（図 3 で内面まで見えにくい黒で覆う）ことも支持されるだろう。

さて、黒は世界的にどのように感じられているのか。図 2（I）の結果は 1993 年に行われた同一調査の全国平均と比べると B（全国 2.6、今回 4.3）と L（全国 4.0、今回 2.6）を除いてほぼ一致しており、色に対する感覚は簡単には変化していない。11 か国語の辞書を用いて、黒に相当する言葉と、黒の対極に位置する白から派生する意味をすべて列挙し図 4 にまとめた。

一見、世界中で黒は悪い意味を持っているようだ。ここでは省略するが紫黄青緑赤桃橙灰についても調べている。そこで、長さが付加されている意味の数を、数値がイメージの善悪を表す棒グラフを作成した。

図 5 より 1) 黒や白に限らず色に対してネガティブなイメージをもたせる言語が大半を占めていること、2) 黒と死が結び付くことは稀で、むしろ内面の柵を前面に押し出している。灰色は生きる苦しみを表す傾向が強いこと、3) リンガラ語や古代日本語には色を外見や実用性のみで判断しており、色に内面の様子を仮託していないことが分かる。特に赤青黒白（灰）の表現しかないリンガラ語は、日本語の色の表現がかつて青赤白黒しかなかった時代と軌を一にする<sup>16</sup>。

原始日本語において赤は「明るい」から、黒は「暗い」から生じたという説がある<sup>17</sup>。暖色系の色全般が「赤」であり、寒色系が「黒」とされていた（例：緑の黒髪）。白は信仰の対象、上位の事物や人を表す色で黄や茶と同一だった。青は水面に映った蒼穹の色で、現代の緑とされている。当時の青は「赤」と「黒」に属さない色全てであった（例：青果）。

黒

I 世界の黒の意味

ドイツ語	Schwarz 不吉な、邪悪な、非合法的な、邪悪な、黒人の、黒く汚れた、保守的な、カトリックの、カンカンに怒る～でいっぱいである
ポルトガル語	preto/negro 難しい、困難な、黒人の、肌の黒い、暗い、陰鬱な、陰悪な、毒のある、邪悪な、黒人の、非公然の、不正な、友、お前
フランス語	noir 珈琲がブラックの、あざになった、暗い、曇った、汚れた、陰気な、不吉な、敵意のこもった、怪奇な、邪悪な、不正な、闇の、黒人の、酔っぱらった
ロシア語	чёрный 黒くなった、煙突のない、暗い、陰気な、悪い、罪のある、邪悪な、裏の、肉体労働の、雑用の、下層階級の、国有的、万が一の時
中国語	黒 暗い、日が暮れた、反動的な、隠れた、秘密の、よこしまである、悪に染まる、姓名
ベトナム語	đen どす黒い、秘密の、不運、やせこけた
英語	black 皮膚が黒い、よごれた、きたない、暗い、暗黒の、暗澹たる、陰鬱な、不機嫌な、むっつりした、腹黒い、邪悪な、厄災の、不吉な、やみの、やみ市の、廃墟と化した、非難を受けるべき、不名誉な、嫌味のある、病的な、グロテスクな、不愉快な、事態が陰悪な、血相を変えて
韓国語	검정 腹黒い、汚い、よごれている、陰険で欲深い
ヒンディー語	काला 邪悪の、恐ろしい、汚れた、コブラ、邪悪な人、罪を犯す、頑丈な、若い、非常に遠く、この世の終わりの火、時を超越した、国外追放
リンガラ語	boindu黒さ、暗さ inda 黒くする indisa 黒くなる mwindu 黒い、暗い na molili 闇の、陰気な
古代日本語	黒し 色が黒くて（汚い）、正しくない、悪い 黒む なんとか暮らしがたつ、生活できるようになる、ごまかす

II 世界の白の意味

ドイツ語	weiß 純白な、潔白な、白髪の、蒼白な、白人の、白衣の、何も書いていない、未定な、幻視症の、酔っぱらっている、おしろい、脂肪
ポルトガル語	branco 明色の、色あせた、無色の、青白い、蒼白な、銀色の、白髪の、白人の、汚れていない、空所、欠落、無邪気で間抜けな男、社会的地位の高い人、文明人、主人、ポルトガル人、刀剣、徹夜明けの、なにも理解できずに、何も食わずに
フランス語	blanc 明色の、単色の、透明の、無色の、何も書いてない、無地の、清らかな、何も無い、実質のない、虚ろな、性的交渉のない、青ざめた、白髪の、日に焼けていない、白人の、王党派の、会話の沈黙、麻痺、熱狂させる、猛練習させる、出し抜ける
ロシア語	Белый 淡色の、色のついていない、非労働者、明るい、反革命の、世間、水、皮肉的に貴族、招集解除証明書、脚韻を踏まない詩、自衛軍
中国語	白 お甲いをだす、反動的なもの、明らかな、何も無い、ほかのものが加えられていない、無駄に、成果がない、無料で、白目で見ると、白化する、口語、字を書き間違えたり読み間違えている、姓名
ベトナム語	trắng 透明の、余白の、丸裸の、すっからかんの、無罪の、白くて清潔な、白くて美しい、白くつるつるした、面白い、過ちに気づく、象牙色の、つやのある、鮮やかな、柔らかい、無垢の、あからさまに
英語	white 純白の、白髪の、雪のある、青ざめた、色の青い、白熱の、熱烈な、無色の、透明な、空白の、邪気のない、潔白な、白人人種の、極端に保守的な、悪意のない、幸運の、縁起の良い、的的中心、帯下
韓国語	흰색 明るく澄んでいる、手を加えていない、元の、見栄っ張りである、中身がない、気前がいい、横柄だ、尊大だ、外見が派手な、けばけばしい、顔が白っぽく脂ぎっている、馬鹿な
ヒンディー語	सफ़द 白い、清潔な、執着や愛情や同情がなくなる、見え透いた嘘
リンガラ語	Mpembe 白、石灰、白墨 pokola mpembe 白くする、漂白する、石灰水につける
古代日本語	白い物 おしろい 白し 明るい 白む 白みを帯びる、勢いがくじける、ひるむ、たじろぐ

図 4 11 各国の黒と白に込められる意味（注 2）

同時に中国生まれの陰陽五行説は、すべての色彩は「青赤黄白黒」から生まれると主張している<sup>17</sup>。それから時代を下って色の大爆発が起きてもお、安土桃山時代にかけて逆行するように灰色の旋律「侘び寂び」が発達した。江戸時代に贅沢を味わうようになった町人を戒めるために徳川綱吉は1683年に「奢侈禁止令」を出した。

これは紫や紅の使用を禁止し、紺のみ許されたが、その中で種類に富む地味な「茶灰黒」が「四十八茶百鼠」として重宝された国は日本ぐらいである。その後は黒以外の色が勢力を伸ばすも、瓦版そして、現代のメディアの発達によって黒が流行色にランクインすることもあった<sup>18</sup>(1980年代後半)。

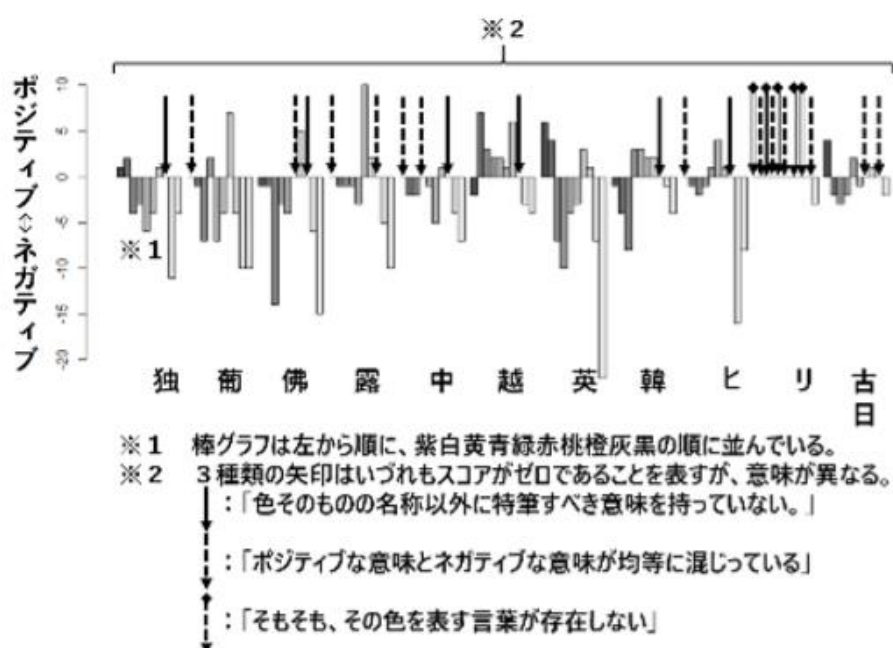


図5 各言語の得点グラフ

## 5. 結論

黒は「生きる上での数多の感情を抱擁した葛藤の色である」と結論付けた。生きている証としての色である。現代社会は闇を締め出して、夜でも色彩豊かな都市を形成したが、色の人々の外見を織りなし、内面に作用し社会を形成する（逆も然り）という強力な劇薬であることを忘れてはならない。

現在、色は人の感情の湧出の制御を超えて氾濫している。その中で、白は「∞か0」、有彩色は「不安定性をもった一時的なもの」であり、孤独や不安など考えたくないものも想起さ

せる<sup>19</sup>が、ただ黒だけは心の内全てを受容し、生きる世界から隠してくれる。

【注】

注1 全体は4因子の出現頻度の大小で評価(Ⅱ)→「甲乙優勢」。個人は4因子の有無で評価(Ⅲ)→「甲乙丙型」(北, S), 「甲乙型」(N)。

注2 リンガラ語はコンゴの言語である。

【参考文献】

- 1 渡辺明日香, ストリートファッションの時代 今, ファッションはストリートから生まれる, 東京, 明現社, 2005, 289p.
- 2 谷崎潤一郎, "陰翳礼賛 青空文庫",  
[https://www.aozora.gr.jp/cards/001383/files/56642\\_59575.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/001383/files/56642_59575.html), (参照 20191211).
- 3 美術手帖, "物質と知覚の普遍性を問う, アニッシュ・カプーアに聞く",  
<https://bijutsutecho.com/magazine/interview/372>, (参照 20191214).
- 4 カジミール・マレーヴィチ著 五十殿利治訳, 無対象の世界, 中央公論美術出版, 1999, 65-100p.
- 5 高木修・大坊郁夫・神山進, 人はなぜ装うのか 被服と化粧の社会心理学, 京都, 北大路書房, 2008, 231p.
- 6 小倉千加子, オンナらしさ入門(笑), 東京, 理論社, 2007, 137p.
- 7 庄山茂子・栃原裕・窪田恵子・青木久恵, 制服としての看護服の変遷と現代における看護服のデザインの違いが看護師および患者に与える心理的影響, 服飾文化共同研究最終報告, 2012, 2013-03, 10-21p,  
[http://dspace.bunka.ac.jp/dspace/bitstream/10457/2007/1/011080212\\_02.pdf](http://dspace.bunka.ac.jp/dspace/bitstream/10457/2007/1/011080212_02.pdf),  
(参照 20191215).
- 8 上林憲司・村田光二, "黒色または白色の衣服が着用者の非道徳的行動に与える効果",  
<http://www.team1mile.com/jssp2016/P1111.pdf>, (参照 20191216).
- 9 有賀敦紀, "絶対評価時におけるユニフォームの色の印象".  
[http://repository.ris.ac.jp/dspace/bitstream/11266/5584/1/kiyo13\\_p009\\_ariga.pdf](http://repository.ris.ac.jp/dspace/bitstream/11266/5584/1/kiyo13_p009_ariga.pdf), (参照 20191215).
- 10 サリバン著 遠山啓序・榎恭子訳, ヘレンケラーはどう教育されたか: サリバン先生の記録, 東京, 明治図書出版株式会社, 1996, 146p.
- 11 キャシーA・マルキオディ著 小林芳郎訳, 子どもの描画からわかること, 東京, 田研出版株式会社, 2014, 364p.
- 12 AFT 公式テキスト改訂版編集委員会, 文部科学省後援公式テキスト1級編, 東京, 内閣府認定公益社団法人色彩検定協会, 2019.

- 13 松岡武, 決定版 色彩とパーソナリティー 色でさぐるイメージの世界, 東京, 金子書房, 2001, 287p.
- 14 熊谷高幸, 自閉症と感覚過敏特有な世界はなぜ生まれ, どう支援すべきか?, 東京, 新曜社, 2017, 182p.
- 15 大澤真幸, “オタクという謎”.  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/ksr/5/0/5\\_KJ00008433919/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/ksr/5/0/5_KJ00008433919/_pdf/-char/ja)(参照 20200103).
- 16 直原利夫, ”リンガラ語単語帳”, 天理教海外伝道部, 1965, 251p.
- 17 小田理央奈, ”衣装から見た色彩：三つの時代の色彩と身分”, <https://www.keiwa-c.ac.jp/wp-content/uploads/2016/12/vt022-4.pdf>, (参照 20191109).
- 18 渡辺安人, 色彩学の実践, 京都, 株式会社 学芸出版社, 2005, p40-p53.
- 19 岩井寛, 色と形の深層心理, 東京, 日本放送出版協会, 1996, 215p, (NHK ブックス, 492).